

研究報告

Meta-Xenakis コンソーシアムの始動とクセナキス・センター CIX について *Meta-Xenakis Consortium in collaboration with Centre de Iannis Xenakis*

水野みか子 (名古屋市立大学), 古川聖 (東京藝術大学)

椎名亮輔 (同志社女子大学)

柿沼敏江 (京都市立芸術大学), 嶋津武仁 (福島大学)

Sharon Kanach (CIX/ルーアン大学), Rodolphe Bourotte (CIX/ルーアン大学)

Mikako Mizuno(Nagoya City University), Kiyoshi Furukawa(Tokyo University of Arts)

Ryosuke Shiina(Doshisha Women's College of Liberal Arts)

Toshie Kakinuma(Kyoto City University of Arts)

Takehito Shimazu(Fukushima University)

Sharon Kanach(Centre Iannis Xenakis, Université de Rouen),

Rodolphe Bourotte(Centre Iannis Xenakis, Université de Rouen)

概要

Meta-Xenakis(以下 Meta-X) コンソーシアムは、クセナキス生誕 100 年記念となる 2022 年に向けて、フランス、ギリシャ、日本、メキシコ、アメリカ合衆国の五カ国の音楽学、作曲、アーカイヴ関連研究者とその所属機関の連携によって立ち上げられた。2022 年には Meta-X 統合企画として五カ国共同運営によるオンライン国際研究シンポジウムが予定されており、その他に、各国オンラインで開催されるクセナキス百周年記念コンサート、展示、ワークショップなども Meta-X 連携企画として打ち出される。発表では、コンソーシアムを統括する Sharon Kanach がクセナキス・センター (Centre de Iannis Xenakis, 以下 CIX) の活動や収集資料を紹介し、Rodolphe Bourotte が UPISketch について説明する。

Meta – Xenakis is jointly organized by a consortium spanning five countries and three continents: the two not-for-profit associations initiated by Xenakis himself [Centre Iannis Xenakis (France) and KSYME/Contemporary Music Research Center (Greece)], plus the Facultad de Música at the UNAM (Universidad Nacional Autónoma de México), plus the Nagoya City University – School of Design and Architecture (Japan), as well as the Xenakis Project of the Americas (Brook Center for Music Research and Documentation – City University of New York). The common goal of our efforts is to create a truly a transcontinental celebration of the life and work of the polymath Iannis Xenakis (1922 – 2001). The five main

partners are actively collaborating with other local artists and institutions. Many of the people involved in this organization are former students, collaborators and dedicatees of Xenakis.

The events will culminate in the Meta – Xenakis Symposium that will take place over a three-day marathon that will be held in Athens (Greece), in Rouen (France), in Mexico-City (Mexico), in Nagoya (Japan), and in New York City (USA) in the Fall of 2022.

1. はじめに

Meta-X コンソーシアムは、クセナキス生誕 100 年記念の国際連携プロジェクトを当面の目標と定めて 2021 年春に始動した。コンソーシアムの中心組織はフランスのルーアン大学付設のヤニス・クセナキス・センター (CIX) とアテネに本拠を置くギリシア現代音楽研究センターである。そこにメキシコ国立自治大学音楽学部、名古屋市立大学芸術工学部、アメリカ・クセナキス・プロジェクトが加わり、五カ国にまたがるゆるやかな組織として、現在は、毎月 3 ～ 4 回程度オンライン実行委員会を開催している。

コンソーシアムでは 2022 年のクセナキスの誕生日 5 月 29 日から年末までを Meta-X の期間と定め、この期間に、関係五ヶ国においてシンポジウム、コンサート、展示、ワークショップ、国際作曲コンクール等を行い、統一ロゴのもと広報や web サイトで連動させる。五カ国が共時的に開催するメインイベントは、5 月 29 日の

オープニング, および, 9月30日, 10月1日, 2日に72時間マラソンでオンライン開催する国際シンポジウムである。

コンソーシアムの日本チームは, 名古屋市立大学, 東京藝術大学, 同志社女子大学という三つの大学の音楽系研究室で連携を図りながら, 大学内, あるいは大学と地域の文化組織等の協力関係の中で企画を進めている。日本から科学・芸術委員会メンバーに加わるのは, 本発表オーサーの5名である。

五カ国ともに運営メンバーのほとんどが音楽学, 作曲, 音楽情報処理を専門としており, 演奏家は少ない。建築やグラフィックデザインの教育組織に携わるメンバーも含まれており, クセナキスの活動にちなんだ学際的な広がり特徴的である。フランスからの主要メンバーの中に図書館でアーカイヴに携わる研究者が入っていることもこの組織の特徴である。

今回の発表はコンソーシアムのキックオフのプレゼンテーションであるので, 企画詳細は事後に譲るとして, ここでは, 中心組織としてのCIXの紹介, 日本メンバーの関心の方向性, 日本電子音楽協会との協働プランについて述べる。以下, 第2章はCIXからの資料提供に基づく記述である。第3章では, 古川, 椎名, 水野がそれぞれ, Meta-Xへの期待を記述する。第4章ではコンピュータ音楽の裾野を広げクセナキスから未来へとつなぐ日本側企画について述べる。なお, 発表に際し, Sharon Kanach と Rodolphe Bourotte がビデオ参加する。

2. ヤニス・クセナキス・センター (CIX)

2.1. CIXのアーカイヴと公共化活動

CIXは, クセナキスが1960年代に設立したCEMAMuや後継のAteliers UPIC/CCMIX (1985年設立)の研究・資料を直接的に受け継ぐ研究組織として2008年にスタートした。先端技術の研究に偏らず, より広い公衆に資するような音楽研究へと拡張するため, 2009年にはルーアン大学付設の研究所となり, 以後, 公共性を大きな柱と活動している。もう一つの柱は, 当然ながらクセナキスのスケッチや写真など一次資料のアーカイヴ化である。CIXのアーカイヴは, クセナキス自身の作品やアイデア・メモばかりでなく, クセナキス関連研究所やそこで開発されたシステムを使用して作曲されたおよそ300人の作曲家の作品の音源やペーパー資料も含んでいる。資料のカタログ化やリスト化は未だワーク・イン・プログレスであるが, 定期的に展示やコンサートで公開されている。さらに, CIXではUPICの現代版とも言うべきUPISketchを開発し, 作曲家や一般向けのワークショップも様々な地域で行っている。

2015年と2016年, CIX主催でルーアン大学とキプロス大学でクセナキス・コロキウムが開催された。そこ

でのテーマはクセナキスが提唱した「連続体」の概念であり, クセナキスやロミテッリの音楽作品の分析・解釈, アーバンデザインやヴィジュアルアーツと音楽の関係, 空間構造論等が分野横断的に議論され, 「インターフェース」をキーワードに形而下学と形而上学を連動させた文理融合の20世紀後半音楽思考が再考された。

2.2. UPISketch ワークショップと教育現場での広がり

UPISketchは, UPICと同じく, 描画を音楽的アイデアとして再定義してソニフィケーションを実現するというコンセプトで開発されている。最初のバージョンは2018年6月に公開され, 現在はOSX, iOS, Windowsそれぞれでのアプリ化と, 音楽専門家からアマチュアや子供までを対象にする, よりシンプルなインターフェース開発をめざしてデザインが進んでいる。描画曲線をサウンドパラメータにマッピングして音楽形式を作り出すためのシンプルなインターフェイスとして, UPISketchのグラフィカルアイコンは, pan/zoom, draw, delete, undo, redo, resetのツールメニューとopen project, save project, library, export sound, settings, help, infoのメニューのセレクトへとユーザーを容易に導いていく。作成されたサウンドはノートとして配置することもできる。

開発当初よりUPISketchは, 音作りに加えてコンピュータ支援教育の現場での有用性を求める方向にあった。この面でCIXの社会実験は極めて積極的である。子供時代の音楽環境や音楽理論の知識の有無にかかわらず, 人々に作曲やコンピュータ音楽の環境を広げ, 持続可能社会に向かうべくCIXは教育現場に入っていく。2018年と2019年に行われたUPISketchワークショップでは, 6~12歳くらいの子どもたちを10人程度のセッションにグループ分けし, システムやマシンに関する簡単な導入の後, iPadを配り, 自由に「お話や景色」を思い浮かべて描く時間を与えた。

「遊ぶことができ, 楽しい経験を得られる」ことをモットーに, Apple Store, iOSnoops, およびSMC2018の際の街中公共空間, 博物館等でのインスタレーションなどで評価を高める一方, フランソワ・ベルナール・マッシュやダニエル・テルジラプロフェッショナルな作曲家からは, 自らのサウンド・ライブラリーの充実, 新たな形の音楽制作へのきっかけとして期待が寄せられた。また, ロサンゼルス・ピッツァー大学メディア研究プログラムではデザイン科目の一つとしてUPISketchがカリキュラムに組み込まれた。

3. クセナキスへの視点

3.1. 日本とクセナキス

CIXの活動展開を受けて2022年のMeta-Xプロジェクトは, クセナキスの名前を掲げつつ, アーカイヴの構

築と公開、アプリ開発、コンピュータ音楽の公共化という三つの現代的な方向性を持っているが、日本チームでは、「日本とクセナキスとの関係」再考を第四の切り口として掲げている。以下、古川、椎名、水野がそれぞれ、Meta-X への期待を述べる。

3.2. クセナキスとフェラーリ 【椎名】

来年が生誕 100 年となるヤニス・クセナキスとその 7 歳年下のリュック・フェラーリは、フランス国営放送でピエール・シェフェールが創設した GRM（音楽探求グループ）で席を共にしていた。1950 年代終わりから 1960 年代にかけてのことだ。彼らが共有していた課題は、当時音楽界を席卷していたセリアリズムにその有効性の限界を突きつけ、それに代わる音楽言語を見出すことだった。二人にとってそれがまずミュージック・コンクレートであった。シェフェールの実験室内での生の音響素材の創作から操作・定着まで、またヘルマン・シェルヘンのグラヴェザーノ研究所での音響機器の発明など、若い彼らが共同で行ったことは数多い。60 年代から後には、クセナキスは推計的音楽、フェラーリは逸話的音楽というように方向性を異にすることになるが、それ以前の彼らの共通点について探ることは、後の方向性の差異について研究することにとっても、非常に興味深いものになるだろう。

3.3. クセナキスと UPIC 【古川】

2020 年、クセナキスの多方面に渡る業績の中、Hatje Cantz 社から出された *From Xenakis's UPIC to Graphic Notation Today* という、特に UPIC というシステムに焦点を当てた書籍に論考を寄稿した。UPIC は GI（グラフィック・インターフェイス）を楽譜として使うことによってあたらしい創作の可能性を切り開いたとも言えるのだが、最初の UPIC はクセナキスの構想のもとギイ・メデニュにより実装され、実はクセナキスも言うように「決して作曲のシステムではなく、自由なフィールドを与えるもの（クセナキス）」であり、彼の作曲のコンセプトとは距離のあるものであった。しかし、その GI の簡便さ、直接性、具体性が UPIC の開発において考慮され、音楽の予備知識がなくてもだれでも簡単に電子音楽に触れることができ、音楽創作をおこなえる汎用性のある教育システムとして、ワークショップのようなものの実施を可能としたことは重要なことである。今日の視点から見れば、作曲家とか作品とかいうことではなく、一人の鑑賞者が、GI を使っているいろいろな音を作って聴いてたのしみ、音と戯れることができるようなインタラクティブアートを作ったと考えることもできる。このようなアспектも含め、Meta-Xenakis がこのクセナキスの仕事の持つ可能性、広がりにより再び光

を当て、議論を起し、それらを未来へと投影していくための機会になることを願っている。

3.4. 京都賞授賞とその後【水野】

1958 年のブリュッセル万博や 1970 年大阪万博鉄鋼館においてクセナキスが展開させた空間性は、制御される音の定位や移動等パラメータごとの数値特性だけでは規定されず、また、アコースモニウムのように上演時に再構築される抽象化された心象風景とも異なる次元にある。クセナキスが言うところの「時間外構造」は、完全な連続体として概念化された「状態」であり、そこには時間の区切りも空間の区切りも存在しない。こうした空間性議論は、未だクセナキスの作品と関連づけて十分に議論されてはいない。一方で、建築と音楽にまたがる形の類似性が、計測可能な実空間を時間と音高の相関に置き換えることを可能にし、このアイデアは、今日的な視聴覚パラメータのマッピングと近いところにあるので、ツールとしての UPIC のコンセプトはむしろ親しみやすいものとなっている。Meta-X のシンポジウムでは、クセナキスの作曲技法・ツール設計の詳細やバイオリジカルな資料研究に加えて、科学、テクノロジー、芸術、社会科学に広がる学際性自体を問うような議論も期待できる。「時間外空間」は、哲学的課題として議論される以上に、インタラクティブツールの出発点として今日化されることになる。今日、日本のピアニスト、打楽器奏者、声楽家らが旺盛にクセナキス作品を上演しているが、そうした継続的クセナキス受容の先に Meta-X が来ることでさらに盛り上がりを見せるだろう。大阪万博鉄鋼館での《hibiki /hana/ma》(1970)、サントリーホール国際委嘱シリーズでの《ホロス》(1986)、京都賞授賞記念講演とコンサート(1997)に続いて、Meta-X の年には、日本とクセナキスの関係が新しい局面に入ると考えている。

4. 日本電子音楽協会との協働プラン

Meta-X と連携する日本の組織のひとつである日本電子音楽協会 JSEM は UPISketch に関するプロジェクトに協力を申し出ている。2022 年の Meta-X では室内楽の作曲コンクールのほかに UPISketch を使った作品の国際コンクールが実施されるが、当然ながら UPISketch のコンクールでは、作曲家のみならず子どもや愛好家、グラフィックデザインや建築専攻の大学生等にも出品しやすいプラットフォームが用意される。UPISketch コンクールの優秀作品は日本電子音楽協会連携コンサートで上演される。

5. まとめ

Meta-X は, 作曲家クセナキス, あるいはより広く, 現代音楽, コンピュータ音楽や電子音響音楽, メディア教育等に興味を持つ団体・個人が国際連携を持つためにとても好い機会だと考える。作曲, 演奏, 音楽学, メディア研究, 教育等, さまざまな分野からの連動企画の提案を期待したい。

6. 参考文献

Bourotte, R., Kanach, S. (2019). UPISketch: The UPIC idea and its current applications for initiating new audiences to music. *Organised Sound*, 24(3), 252-260.

7. 著者プロフィール

水野 みか子 (Mikako MIZUNO)

作曲・音楽学分野で活動。2001 年, 音楽の空間性に関する研究によって建築学分野で博士 (工学) 取得。2011 および 2013 年, 北京, カルガリー, 名古屋, 東京を高速音響送受信システムで結ぶネットワークコンサートを実現。2016 年パリ・ソルボンヌ大学招聘研究員。作品は, 管弦楽のための *Parva naturalia* など多数。日本電子音楽協会会長。名古屋市立大学大学院芸術工学研究科教授。

古川 聖 (Kiyoshi FURUKAWA)

ベルリン芸術大学, ハンブルク音楽演劇大学にて I.YUN, G.Ligeti のもとで作曲を学ぶ。スタンフォード大学で客員作曲家、ハンブルク音楽大学で助手, 講師を経てドイツのカールスルーエの ZKM でアーティスト研究員。作品は, 新しいメディアや科学と音楽の接点において成立するものが多く, 1997 年の ZKM の新館のオープニングでは委嘱をうけて, マルチメディアオペラ『まだ生まれぬ神々へ』を制作・作曲。多くの受賞歴がある。東京芸術大学・先端芸術表現科教授。

椎名 亮輔 (Ryosuke SHIINA)

東京大学大学院博士課程満期退学。ニース大学哲学科博士課程修了。東京大学助手, パリ第 3 大学講師、リール第 3 大学講師をへて, 現在は同志社女子大学教授。著書『デオダ・ド・セヴラック — 南仏の風、郷愁の音画』(アルテス・パブリッシング) で第 21 回吉田秀和賞受賞。その他の著書に『音楽的時間の変容』(現代思潮新社), 『狂気の西洋音楽史』(岩波書店) などがある。

Sharon KANACH

アメリカの音楽家。パリでナディア・ブーランジェに師事。協働者としてクセナキスの著書を翻訳・編集。Musique de l'Architecture (2004), Music and Architecture: Architectural Projects, Texts, and Realizations (2006) をはじめ, クセナキスとの協働・責任編集として多くの書籍を出版している。CIX およびアメリカ・クセナキス・プロジェクト代表。

Rodolphe BOUROTTE

作曲家, 研究者。UPISketch を開発。



この作品は, クリエイティブ・コモンズの表示 - 非営利 - 改変禁止 4.0 国際 ライセンスで提供されています。ライセンスの写しをご覧になるには, <http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/> をご覧頂るか, Creative Commons, PO Box 1866, Mountain View, CA 94042, USA までお手紙をお送りください。